

流鏝馬				
1	2014年(平成26年)	6月号(205号)	小川正夫	①流鏝馬～美多彌神社と和田（みきた）氏
2	2014年(平成26年)	7月号(206号)	小川正夫	②流鏝馬と小笠原氏、そして三好一族
3	2014年(平成26年)	8月号(207号)	小川正夫	③地域住民の手による流鏝馬催事～
南区ニュータウンに眠る歴史と文化Ⅰ～Ⅹ				
1	2018年(平成30年)	7月号(254号)	小川正夫	高倉寺 ニュータウンに残る閑寂幽棲な陶工の寺
5	2019年(平成31年)	1月号(260号)	柿澤和代	朱殿が映える多治速比売（タジハヤヒメ）神社
6	2019年(平成31年)	2月号(261号)	竹原俊一	中世仏教美術の宝庫～法道寺
7	2019年(平成31年)	4月号(262号)	福井洋子	妙見山感應寺と上神谷街道
8	2019年(平成31年)	6月号(263号)	生島英造	美多彌神社（ミタミノジヤ）
9	2019年(平成31年)	8月号(267号)	安田元國	光明池
10	2019年(平成31年)	9月号(268号)	森口照男	櫻井神社・上神谷の八幡さん
11	2020年(令和2年)	12月号(283号)	小川正夫	堺で唯一の大随求菩薩がある海岸寺
泉北ウォーキング				
1	2021年(令和3年)	3月号(286号)	宮尾喜治	泉北ウォーキングⅠ
2	2021年(令和3年)	4月号(287号)	宮尾喜治	泉北ウォーキングⅡ
3	2021年(令和3年)	5月号(288号)	宮尾喜治	泉北ウォーキングⅢ
幻の陶器の里				
14	2022年(令和4年)	4月号(299号)	小川正夫	『幻の陶器の里』 ①陶工の首長の墓 湯山古墳
15	2022年(令和4年)	6月号(301号)	小川正夫	『幻の陶器の里』 ②陶器荘の支配者
16	2022年(令和4年)	7月号(302号)	小川正夫	『幻の陶器の里』 ③堺市の母なる川 石津川水系
17	2023年(令和5年)	8月号(315号)	渡邊和彦	北村古塁（陶器城跡）について

南区・流鏑馬 NO.1～美多彌神社と和田（みきた）氏～

[小川 正夫]

美多彌神社は、泉北ニュータウンの鴨谷台（旧地名 美木多上）にある延喜式に記載された由緒ある式内神社です。

社名の美多彌（みたみ）は、主祭神が天児屋根命（あめのこやねのみこと）であることから、平安時代の『新撰姓氏録（しんせんしょうじろく）一和泉国神別一』に現れる天児屋根命を祖とする「民直（みたみのあたひ）」という氏族との関連が考えられますが、定かではありません。

社殿があった地は、和泉国和田郷（にぎたのさと）で、「和田（にぎた）」の地名は、この辺りの旧地名美木多（みきた）として伝わっています。『新撰姓氏録一和泉国神別一』には、同じく天児屋根命を祖とする「和太（和田）連（にぎたのむらじ）」があり、南北朝時代に和田庄の領主であった和田氏が美多彌神社の神主であったことが、『和田盛助処分状（1461 年）』から窺えることから、和田氏が美多彌神社を鎮守として古くから信奉してきたことは間違いありません。



南朝方の武将であり楠一族とも言われる和田氏により、後醍醐天皇の御代には3万坪を有する境内

を持つ神社として繁栄しましたが、天正年間に織田信長の兵火に遭い焼失してしまいました。文禄元

年（1592）にそれを復興したのも和田氏の和田道讃という人物で、江戸時代には牛頭天王が祀られ、神仏混淆により得泉寺が神宮寺として栄えました。明治時代の神仏分離により得泉寺は廃され、八坂神社となり、更には神社合祀政策により近隣の神社8

社を合祀して社名を美多彌神社に戻し、今に至っています。

神社の近くに、当地の大庄屋であった和田氏が江戸時代に建てた一千坪のお屋敷が残っていましたが、残念なことに老朽化により保存を望む声の多い中、今年1月に取り壊されてしまいました。楠一族を示す大きな菊水の紋が見事であったお屋敷は、今や更地となり大きな楠木だけがその威容を偲ばせるように佇んでいます。

鎌倉時代の和田氏古文書「沙弥性蓮（和田清遠）処分状」（1294 年）に、和田氏が「武射（流鏑馬）」を執り行っていたことが窺われる記述があったことから、美多彌神社での流鏑馬神事復活への動きが始まりました。

南区・流鏑馬 No.2 ～流鏑馬と小笠原氏、そして三好一族

[小川 正夫]

『和田氏古文書』に、「武射（むしゃ）＝流鏑馬（やぶさめ）」を執り行っていたとの記述があり、それが美多彌神社での神事復活につながった、ということまでは前回お話しましたが、「流鏑馬」と言われる神事とは？その歴史は？というのが今回のテーマです。

まず言葉の語源を尋ねると、流鏑馬は「矢馳馬（やはせめ）」と呼ばれ、文字通り馬を走らせながら矢を射ることで、それが神事として執り行われるようになり、そこで使用される矢が「鏑矢（かぶらや）」となったことから、「流鏑馬」という文字が当てられるようになりました。

流鏑馬の起源については、古いものでは第 29 代欽明天皇の御世に、宇佐神宮の神前で天下泰平を念じ三本の矢を射たとの伝承にまで遡る説もありますが、文献上で最も古い記録は、平安時代中頃の『新猿楽記（しんさるごうき）』という世の中の達人、名人を列挙した記事があり、その中の矢の名人の記述に流鏑馬が登場することから、平安時代には既に盛んに行われ、矢を射る術のひとつとしてもてはやされていたことが分かります。

武家が政権を取った鎌倉幕府の時代になると、武家にとって大事な神事となり、鶴岡八幡宮の「放生会（ほうじょうえ）」で行われる流鏑馬の射手になることが武士の誉れであったことが、鎌倉時代に記録された『吾妻鏡（あずまかがみ）』から伺えます。

吾妻鏡によれば、この名誉ある射手に選ばれた武士のなかに小笠原長清と武田信光という源氏の武士がおり、これが現代にまで流鏑馬を伝える二つの宗家である小笠原流、武田流の始祖となります。美多彌神社で流鏑馬神事を執り行なわれたのは、小笠原流の「弓馬術礼法小笠原教場」の皆様なので、小笠原流流鏑馬について見てみましょう。

右の紋が小笠原流の家紋ですが、よく似た家紋を皆様はご存知ですね。そう、我々観光ボランティアが見慣れた三好一族の三階菱に、なんと「十字」が刻まれています。三階菱はもともと小笠原家の家紋であり、三好一族は、上述の小笠原長清が承久の乱で巧を挙げ阿波国守護となり、その後裔が土着して地名の三好を名乗ったのが三好一族の由来です。小笠原家は長清の孫の代に、惣領家を長男の長忠が継ぎ、次男の清経は別家をたて、その紋を十字入りの三階菱としました。十字を入れた由来は残念ながら分かりません。



その後、永禄年間（16 世紀半ば）になり、清経家は 17 代経直の時、弓馬術礼法の道統を惣領家から承継し、江戸時代には幕府の弓馬術礼法の師範となり、明治維新までその役を務めました。これが弓馬術礼法小笠原教場の由来です。

美多彌神社で、十字入り三階菱を見た時、三好一族と流鏑馬は、どんなつながりがあるのか？との疑問が浮かびましたが、小笠原長清という根本でつながっていたのです。小笠原流の流鏑馬が、美多彌神社でどのように執り行われたかは、次号でご紹介します。

南区・流鏑馬 No. 3 ～地域住民の手による流鏑馬催事～

[小川 正夫]

美多彌神社の流鏑馬神事を復活させたのは、美多彌神社の前宮司西尾氏（故人）の熱意と、地元の歴史研究家である山本氏の考証、自治会会長の藤田氏の郷土の歴史遺産を子供たちに伝えたいとの想いが織りなした結果でした。前宮司は道半ばでお亡くなりになりましたが、その遺志を継いだ「美多彌神社流鏑馬保存会（藤田会長）」が弓馬術礼法小笠原教場（小笠原流）宗家の全面的な支援を受けてようやく昨年 10 月 26 日実施にまで漕ぎつけたのに、台風 27 号の来襲で涙を吞んで延期するという紆余曲折の結果、今年 3 月 29 日にようやく実現しました。この催事を行う為に氏子の皆様だけでなく、地域の住民がボランティアとして参加しました。



かくいう筆者も、毎年初詣にお参りするだけのご縁ながら、お誘いを受け喜んで参加させて頂きました。地元の檜尾の郷土史家で、我々堺観光ボランティア協会もお世話になっている桧本多加三先生からのお誘いで、先生の門下生一同に動員が掛り、一般公募のボランティアも含め約 20 名の男女が小笠原流流鏑馬の「諸役」を相努めさせて頂きました。小笠原宗家に伝わる流鏑馬神事は、男子は鎧直垂、女子は白拍子風水干などの古式豊かな衣装を身にまとい、「的奉行」、「合図扇」などの諸役の所作を小笠原流礼法に従い行わねばならず、当日朝から特訓を受けました。小笠原流礼法という伝統的な所作はもちろん初めて、神事であるとの緊張感も加わり、身が引き締まる経験でした。

流鏑馬に使われた 4 頭のサラブレッドも実は流鏑馬は初めての経験で、朝から馬場での走行に慣らし、馬上で手綱を離して弓を弾くという動作をしても驚かないようにさせるための演習を繰り返し本番に臨みました。馬というのは非常に神経質な動物で、初めての馬場で大勢の見物人を前にすると、緊張と興奮で御するのが非常に困難とのことでした。

美木多小学校の校庭に特設の馬場が作られましたが、本来は 250m ほど必要なのですが、160m 程度しか取れず、短い馬場、初経験の馬などの厳しい条件の中、流鏑馬が実行されましたが、2 つの的を射ぬくのは難しく、落馬する方もおられました。手綱を離して足だけで馬を御し、弓に矢をかけるだけでも大変で、これをこなすことが武士の誉れとされたのがよく分かります。



流鏑馬を一般の見物席で見るより、諸役として参加すると、間近で馬の荒い息づかい、馬が疾駆して蹴散らす馬場の土をかぶるというまさに砂かぶり席で、生の迫力が体感出来ることです。720 年ぶりの流鏑馬神事をこれで終わりにするのではなく、子供たちが誇れる地元のイベントとして継続催行したいとの保存会の想いは強く、4 年

後の催行が決まったようですので、皆さんワールドカップと同じく未だ先のことでありますが、次回には是非とも泉北まで見物に、いや、できれば諸役として参加されることをお勧めします。

南区ニュータウンに眠る歴史と文化」No.1

高倉寺(たかくらじ)～ニュータウンに残る閑寂幽棲な陶工の寺～ 【小川正夫】



南区の歴史・文化のご紹介の第1回となります。数多いスポットの中で何処を選ぶか迷いましたが、堺の偉人の中でも筆頭に上がる行基上人の建立した四十九院の第一番高倉寺をご紹介しますことにしました。

日本全国に行基建立とされるお寺は大変多く、何と1,400以上あるとのことですが、『行基年譜』記載の四十九院の中で、行基生誕の地である家原寺は別格として、その筆頭にあるのが高倉寺こと大須恵院(だいすえいん)で、慶雲2年(705)行基38歳の時に建立されました。

「須恵」は須恵器(陶器)を意味し、今の泉北ニュータウンを中心とした泉北丘陵一帯は、日本書紀に「茅渟県陶邑(ちぬのあがたすえむら)」と記載され、5世紀から10世紀にかけて約600年間も続いた須恵器の大生産地でした。縄文時代から弥生時代まで1万年もの間、土器しか作れなかった倭国に、革命的な新素材として鉄とともにセラミックが登場し、巨大古墳群の築造を可能とし、水を透さない高級器具が実用化され、前方後円墳と須恵器は、大和王権のシンボルとして全国に広まりました。大須恵院は、行基と同じ渡来系の陶工たちの為に建立された寺院であり、陶荒田神社(中区)と並んで、陶邑の陶工たちの聖地でした。行基を大僧正として崇めた聖武天皇は、大須恵院を七堂伽藍の大寺院として造営したと云われます。

弘仁元年(810)には、弘法大師が参来し大日如来の尊像を刻んだとされ、以来真言宗のお寺となっています。高倉寺と呼ばれるようになったのは、平安時代に高倉天皇が行幸され「大修恵山高倉寺」の山号寺号を賜ったことによります。しかし、陶器生産の全国への拡散、乱伐による燃料の赤松の枯渇などにより、陶邑も衰え、南北朝時代から戦国時代の戦乱により、高倉寺も荒廃の一途を辿ります。これを再興したのが江戸時代に陶器藩の領主となった小出氏でした。小出氏は、尾張の出で、豊臣秀吉の母(大政所)の妹を妻として秀吉を支えた小出秀政を祖とします。豊臣親藩でありながら、関ヶ原の陣にも生き残り、岸和田藩や出石藩の領主となりますが、秀政の二男秀家の子三尹(みつただ)が、陶器藩の祖として、現在の泉北ニュータウンの泉ヶ丘地区からお隣の中区に連なるセカ村1万石の領主となりました。三尹は、荒れ果てた高倉寺を小出家の菩提寺として、今に残る立派な寺院として再興します。二代目の有棟(ありむね)の時には、福島屋治郎兵衛を使い福田新田を開発するなど、小出氏の最盛期を迎えます。有棟は幕閣とも繋がり、徳川家康のブレインで徳川幕府の儒官であった林羅山を招き、領内の「お茶山」で遊びましたが、そこからの風光を羅山は十編の漢詩「陶器十景」に詠んだということが、「和泉名所図会」に記されています。そのお茶山には、現在は大阪府立大型児童館ビッグバンが建ち、「茶山台」の地名のもとになっています。現在の高倉寺は、泉北ニュータウンの中心部にありながら、江戸時代から「閑寂幽棲の地」と賞された静かで広大な境内を残し、堺市指定有形文化財である金堂、御影堂、宝起菩薩堂の他、数多あった子院のうち、唯一残る寶積院(ほうしゃくいん)や、大日堂などの古い伽藍が立ち並んでいます。宝起菩薩を祀る宝起菩薩堂は全国でも例の無い珍しいもので、寺宝の「法起菩薩曼荼羅図(ほうきぼさつまんだらず)」は、堺市指定有形文化財で、5月の堺市博物館の企画展「堺市の指定文化財」に出品されていました。また、一般拝観はできないので残念ですが、秀吉が茶を楽しむ為に小堀遠州が造り、秀吉が京都聚楽第の一字を与えたと云われる茅葺の茶室「寶聚庵(ほうじゅあん)」が、その古閑な佇まいのままひっそりと残されています。

皆様も、泉北ニュータウンの地名「高倉台」の謂れとなっている「閑寂幽棲」なお寺「高倉寺」を是非一度お訪ねください。

「朱殿が映える多治速比売（タジハヒメ）神社」

【柿澤 和代】

青空に、くっきりと、こんなにも朱殿の映える神社があるか？それもそのはず、ここは多治速比売命という女神を主祭神とする神社で、建築物や境内至る所に、独特の艶やかさと華やかさがみられる。年があらたまり、晴れ着姿の善男善女が、平成最後の新年を寿ぐために、人それぞれの願いを胸に、同神社の玉砂利を踏みしめることだろう。朝廷が認めた格式ある神社、延喜式内社は、和泉国大鳥郡には 24 社あるが、そのうちの一社で創建は西暦 30 年、第 28 代宣化天皇の御代と伝わる多治速比売神社。



宣化天皇は継体天皇の第 2 子で、子孫に河内国多比郡を根拠とした多治比氏がいる。主祭神として祀られる多治速比売命との関係がしのばれるが、文献や記録に見出すことが出来なかった。おそらく、この付近の陶器生産に携わった人々の、集落の守護神として創建されたのであろう。ヤマトタケルの妃であったと伝わる多治速比売、神とまで崇め祀られた蔭には、ヤマト王権との政略的な婚儀や、相模の走水（ハシリミズ）で海中に身を投じた弟橘比売命（トチバナヒメ）のように、人々や一族のために身を犠牲にした何かを請け負ったのではないかと・・・？などと考えるのは穿ち過ぎだろうか？

創建当時の様子はわからないが、永正 15 年（1518 年）からの、この付近の宮座の記録「上神谷若松荘上・下条」が存在していたことや、江戸時代に記された「高山（コウゲン）縁起絵紙本著色 6 巻」が残されていたことで、同神社は天神（菅原道真）・牛頭天王（素戔鳴 スサノオ）・蔵王権現を祀り、江戸時代は「高山天神」（コウゲン テンジン）と呼ばれて崇拝されていたこと、明治のはじめ神仏分離令で廃寺となったが神宮寺として総福寺があったことなどがわかる。朱と緑青が鮮やかな本殿は天文 8 年（1539 年）～天文 10 年（1541 年）に再建されたという棟札や、高石の大工「そ五郎」の名が書かれた墨書が見つかり、室町時代の遺構として昭和 24 年 2 月、国の重要文化財に指定された。

三間社入母屋造り、正面には千鳥破風（合掌型の板）、向拝（社殿の屋根の中央が前方に張り出した部分）、その軒先には曲線状の唐破風をつけて、桃山時代の先駆となる華麗で写実的な彫刻、和泉国の一神社でありながら、南都や四天王寺に劣らない技術の高さが随所に見受けられ、獣の頭のような珍しい木鼻（水平材や柱から飛び出した部分の彫刻）や、向拝の手挟（テマ）には、ここだけという芭蕉と蟬螂（かまじ）の彫刻が施されている。蟬螂はあたかも前足をかざし礼拝しているかのような仕草をみせる。をみせる。

再建時の天文年間、どんな歴史ドラマが繰り広げられていたのだろうか。天文元年、三好元長が顕本寺で自害、この本殿が再建をはじめた天文 8 年、元長の長男三好長慶が上洛し、信長が出てくる 20 年前、最初の天下人として名乗りをあげた。天文 10 年には伊勢神宮式年遷宮が行われている。戦国の年には伊勢神宮式年遷宮が行われている。戦国の世とは言え、堺がひとり栄華を極めていた時代である。地域の信仰を集めて、この本殿の再建に合力した氏子や村人たちの誇りが、いまでも秋の大例祭に残っている。大庭寺、小代、大平寺、和田、伏尾、大庭寺、各地のだんじりや神輿が結集する平井、秋祭は長い歴史の中で世代から世代へ受け継がれ、日本古来の神社や氏神が、地域を結びつける大きな役目を担っていることに気付かされるのである。仲間意識を育み、人々の想いが共有でき、地域に根差した信仰の場を持つことの幸運が爆発するのが、この秋祭である。秋祭である。

すぐ横にある梅林は、昭和 38 年、泉北ニュータウンの造成と臨海の埋め立て用に山林が削られ、もと

もと同神社は本殿とともに同神社は本殿と 13 社の末社をあわせて荒山宮（コゲンノミヤ）と称していたので「荒山公園」として整地された。

早春には「摩耶紅梅」「楊貴妃」「開運」などのように、美しくもめでたい名がついた 1400 本の梅が本の梅が咲き誇り、いまや南大阪屈指の梅の名所となっている。

梅が終ると、桜、新緑、紅葉、四季折々に色を変える神域、「花並木ありて神山間なさず」公園の中心部からは金剛、葛城山の山並み、西に目を転じれば茅渚の海が望まれ、夕陽が沈むころの荘厳さは言葉では語り尽くせない。言葉では語り尽くせない。



境内の一角に「海軍中将 鈴木貫太郎」の玉垣が・・・鈴木貫太郎は太平洋戦争終結時の内閣総理大臣をつとめた人で、慶応 33 年、同神社の氏子村、久世村（伏尾）で関宿藩家老の息子として誕生した。昭和 11 年の年の 2・26 事件で反乱軍に襲われ、死路をくぐり抜けたのは多治速比売神社の神のおかげと、翌年礼拝に来た。そして、またも「日本の一番長い日」終戦の日の早朝、国粹主義者に襲撃されるが、間一髪救出された。幼少より暴走した馬に蹴ら国粹主義者に襲撃されるが、間一髪救出されり、海軍時代は夜の海に転落するなど、幾度もの危機を脱した貫太郎の運の強さは、多治速比売神社の守護のおかげか？

毎年、11 月 6 日に行われる同神社の特殊農耕神事「福石まつり」、正式には「福石のおこないの式」と言われ、柳の枝 22 本の間に版木で作ったお札を本の間に版木で作ったお札をススキの穂と榊の葉とともにさし、これを「牛王杖」（ゴウヱ）と称し、神前で祈祷の後、苗代の水口に挿しておくといナゴなどの害虫除けになるとか・・・。

境内に鎮座する福石には、こんな昔ばなしも残っている。和田村の働き者の夫婦の家には、貧乏神住みついて住みついて、出ていく気配がない。働けども働けども、貧乏神がたらふくおまんまを食べるせいで、夫婦の暮らしは一向に楽にならず、ある日、思い余って女房が腰紐を見せると、色香には勝てず、貧乏神が石になって退散するというお話、貧乏神を疎ましく思いながら、共存させている心優しい夫婦、本当は誰にでも喜んでもらえる福の神に生まれてきたかったと嘆く貧乏神、どこか滑稽で憎めない神さん。世話になった礼を述べて石に……。実はその神さんのおかげで、人一倍働き者になったことを感謝する夫婦、村一番の長者となって、その石は、いま「福石」として同神社に晴れやかに鎮座している。目先の利だけに血走り、自分の利益にならないものは排斥しようという現在の風潮にあって、この神社に残るおかし話は、ほのぼのと子どもたちに伝え残していきたいものである。に伝え残していきたいものである。

「南区のニュータウンに眠る 歴史と文化」 NO.6

中世仏教美術の宝庫～法道寺

【竹原 俊一】

今回は堺市南区にある、真言宗「法道寺」をご案内させていただきます。泉北高速鉄道「泉ヶ丘駅」より南海バス「鉢ヶ峯」行きに乗り約20分、「鉢ヶ峯」バス停下車徒歩2分、堺市営公園墓地に隣接する地に法道寺があります。車の方用に寺院前に駐車場がございます。春は桜・夏は新緑・秋は紅葉に囲まれ、特に寺周辺の桜は堺市で最大の本数を数え、春爛漫の折りにはソメイヨシノ・シダレザクラなど5種類約3000本の桜の乱舞で彩られます。近くには堺市唯一の国宝建築物のある「櫻井神社」・大阪三大妙見の一つ「感応寺」もあり、3月末から4月にかけてのお出かけを是非お勧め致します。



中門

さて真言宗「法道寺」の正式名称は「鉢ヶ峯山法道寺」であり、堺市南東部に位置する真言宗の古刹です。その由緒を記す「鉢ヶ峯山長福寺縁起」によると、天智9年(670)法道上人により開かれたとされ、古くは「閑谷院長福寺」と言い、子院が49もある大寺院だったそうです。法道上人は、インドから渡来した伝説上の人物で、「飛鉢の法」を行い、靈験を顕示し朝廷の勅願寺になったそうです。又その用いていた鉢を近在の山に埋めた事が、この地域の地名「鉢ヶ峯」のルーツとも言われています。法道上人開基の寺院は西日本に多く、近辺では上神谷地区の富蔵「感応寺」、泉田中「西芳寺」があります。「縁起」によると、第52代嵯峨天皇(809-823)は伝教大師に、第53代淳和天皇(823-833)は弘法大師に、第54代仁明天皇(833-850)は慈覚大師に勅命を下して祈願所にされるなど、皇室からも厚く信任を受けた様です。しかし、残念ながらこの「縁起」内容を裏付ける事蹟は無く、史実とはいえない様です。実際は、平安時代後期頃に建立された様です。それは、まず寺院に残る最古の文化財が平安後期に集中、又法道上人が開基と伝わる寺院の多くが平安末という点、更に金堂下層から出土した軒丸瓦の年代鑑定より、平安後期の創建と考えられています。通常の寺院建築では、まず金堂、そして食堂・多宝塔へと進むからです。

そして、鎌倉後期から南北朝時代にかけては、食堂・多宝塔他の伽藍及び内部も整えられた時期に当たります。寺に残る年号には、南朝・北朝両方の年号が併存し、和泉地域の複雑な環境が伺われます。その後、戦国期には織田信長の根来攻め等もあり多くの近在の寺社が罹災する中、幸いにも法道



金堂

寺の伽藍・仏像群の多くが、難を逃れた様です。江戸時代に入り大きな出来事としては、寺号を変更した事です。享保元年(1716)、八代将軍吉宗に長子が誕生します。のちに九代将軍になる家重ですが、その幼名が「長福丸(ナガトミ丸)」と名付けられ、将軍家に対する配慮から、同年に寺自らが寺号を開基の名前より「法道寺」に変え現在に至っています。

それでは現在の寺院をご案内致します。境内には、鎌倉時代後期建築の「食堂」、南北朝時代の「多宝塔」、江戸時代中期の「大師堂」、江戸時代後期の「金堂」・「中門」があり、又重要文化財の「十六羅漢像十六幅」、

堺市指定文化財の「阿弥陀三尊図」「金剛力士像」等、豊富な陣容で来訪者を迎えてくれます。

バスを降り徒歩2分で寺院の門前に立ち、下馬石を左足元に見て約20段の階段を上ると、まず最初に私達を出迎えてくれるのは、本寺の入り口にある楼門形式の「中門」と、そこに安置されている堺市指定有形文化財で鎌倉時代に造立された寄木造りの像高約3mの一对の「金剛力士像」です。寺院の境内を守る者として毅然とした姿が印象的です。平成14年から実施された解体修理中に、向かって左側の吽形（ウギョウ）像の右膝部分から墨書木札が発見され、鎌倉時代弘安6年（1283）に造立されたことがわかりました。その力士像の背後の壁を隔て背中合わせに境内側を向いた処に南北朝時代の「二天立像」も安置されています。楼門は、堺市域では南宗寺中門、菅原神社楼門と当寺のみです。中門をくぐると右側には手水舎が有り、正面には法道寺の中心をなす建物、「金堂」があります。五間四方の建物に回廊を巡らす「金堂」は中世仏堂の様式で、江戸時代後期安政7年（1860）頃に再建された様です。内陣には須弥壇上に、いずれも平安時代後期の作で優品と言われる本尊薬師如来像三体と、薬師如来を信奉する者達を守護する、鎌倉時代の作十二神将立像の12体が薬師如来の背後に祀られています。



太子堂

そして、金堂の左側に目をやると、どっしりとした安定感のある「多宝塔」があります。建立時期は、建築様式又昭和の解体修理の際に降ろされた丸瓦銘より、南北朝時代、正平23年（1368）頃の建立と考えて良いようです。この多宝塔の下層は和様を基調とし、上層は禅宗様の手法を多用した折衷様になっています。上層屋根周りの放射状に延びる垂木、組み物の鯨の彫り物等、大変珍しい建物の様です。写真は、平成31年1月撮影で、丁度塔の修理中で足場が組まれていました。1月中には修理は完了する様です。

更に左に目をやると「食堂」です。僧侶が一堂に会して食事をする場所です。明確に建築年代を示すものは有りませんが、その構造・外観等から判断すると、鎌倉時代後期の建築だそうです。傾きが緩やかな屋根で本瓦葺き、柱は全て円柱、建具は上半分を開ける半蔀（ハジツミ）が多く使われています。但し江戸時代に内部が改装され、諸仏を安置する仏堂に変わっている様です。全国でも数少ない食堂であり、大阪府下でも、他に野中寺・金剛寺に見られるだけであり、その中でも最も古い遺構として知られています。

最後に、正面金堂の右側に配置されているのが「大師堂」です。食堂・多宝塔に続く古い建物です。正面三間側面四間で、正面が蔀戸（シヅメ）、側面は引違い戸です。お堂の周りには、四国88の寺院名が石板に刻まれ、お堂を一周すると、簡易な八十八か所巡りが出来ます。法道寺の中心伽藍を御案内致しましたが、法道寺には、平安時代後期以降の中世の仏像・絵画他が多くあり、和泉地方に於ける中世の仏教美術の宝庫とも言われています。伽藍内部を日頃は見ることが出来ません。

「法道寺の至宝 鉢峯山のほとけたち」（堺市博物館発行）の冊子をガイド役に是非お訪ね下さい。「泉ヶ丘駅」発のバス便は本数が少なく事前に時刻表のチェックをお勧めします。特に初めての方はきっと、泉北にこんなお寺が、と思われるのではないのでしょうか。

「南区のニュータウンに眠る歴史と文化」NO.7

妙見山感應寺と上神谷街道

【福井洋子】

～現生利益を願い、北斗星をまつる妙見信仰、江戸期の大坂で大流行となり、大にぎわいを見せた時代があったが・・・今はひっそりと上神谷の妙見さん～

堺の街道と言えば、竹内街道、長尾街道、熊野街道、紀州街道、西高野街道の五街道が有名ですが、かつて江戸時代には、妙見道として知られ、大変通行の多い街道がありました。これが上神谷（ニダニ）街道です。この街道は旧市内から、中央図書館の横を通り、大仙公園の中を抜け百済川を渡って南下し、荒山公園の西側を進み、片蔵の青少年の家の前を過ぎ上神谷の妙見さん感應寺に至ります。大仙公園内には、図書館と日本庭園の間の道を南に向かうと祠があり、身代わり地藏尊と道標の一つがあります。この辺り昔は「原茶屋」と呼ばれたところ



妙見山感應寺

です。沿道には、多治速比売神社や小谷城郷土館、櫻井神社があり、全体に起伏がゆるやかで歩きやすい道になっています。この街道は河内長野市にある天野山金剛寺までつながっています。

街道をいくと、泉北ニュータウンの泉ヶ丘駅と梅美木多駅の間の谷筋が上神谷地域で、そこは石津川の上流地域になるところです。妙見山感應寺上神谷の妙見さんと親しまれている日蓮宗感應寺、はるか泉北ニュータウンを望む上神谷地区の小高い山の上にあります。縁起によると大化元年（645



本堂孔雀の意匠

年)、唐の聖僧で鉢が峰法道寺を開山した法道仙人が、大乘法華経を誦じた時、北極星が童子に化して姿を現し、この姿を一刀三礼の儀をもって浄刻し祠建ててまつったのが起源とされています。妙見堂が建ったのは江戸時代初期万治元年（1658年）、境内に建立されている鋸屋（がざりや）藤左衛門の碑に「明暦年中泉州堺妙國寺の大檀那となり、

万治元年3月16日当寺を建立す」の銘文があります。かざり屋とは、鉄砲の象眼をしていた家で、妙國寺の大檀那であった関係から、同寺の日俊上人を導師として開山されましたが、その為妙國寺の奥之院ともいわれました。江戸時代中期から妙見信仰が盛んになり摂津能勢妙見、河内星田妙見とともに「大坂三大妙見」として賑わったようです。妙見とは、北辰菩薩または妙見尊星王ともいい、北斗星をまつり、国土を守り、災害の消滅の祈願仏です。一般には七難即滅七福即生の靈驗ありといわれ、特に厄年の祈願、星祭の神として大阪、堺、岸和田、泉佐野や遠く和歌山、四国からも信者が参拝しました。

お堂は、万延元年（1860年）火災により焼失しましたが、慶応元年（1865年）に再建され現在に至っています。焼けた本堂は多くの信者により再建され、その大工が岸和田の地車大工であったので地車と同じような、唐獅子に牡丹や孔雀など江戸時代に流行した意匠が肉厚の透かして彫られています。本殿の前の参籠所の上は格天井（ゴウテンジョウ）になっていて、ます。その格子に家紋が入れられ

氏名が書かれています。ここには再建に力を入れた家々の家紋が描かれています。境内には妙見講の石碑、妙見道標柱などが立ち並び、正面大鳥居横に立つ石柱は、泉ヶ丘駅前辺りにあった妙見参り信者の休息所「桜木茶所」にあったものを泉北ニュータウン造成により移転したものです。このお寺へ歩いて参拝するには、泉北高速泉ヶ丘駅から歩いて30分の櫻井神社から、前の坂道を登っていくと上神谷小学校の横に出ます。ここからの景色は水田を中心とした田園風景であり、素晴らしい里山風景に出会えます。少しコースを外れて農地のなかの細い道を歩いて、緩い坂を上りきると富蔵の集落に入るので、左手に下がっていく道を行けば、正面に鳥居がある感應寺があります。そこは一見して山寺の風情を感じるお寺です。この辺りの風景、四季折々の素晴らしい景色に出会えます。ハイキングコースの案内板もありますので是非歩いてみて下さい。

主な年間行事は、2月3日「節分星祭り厄除け祈禱会」抽選会と甘酒のふるまいがあります。8月16日には「万灯供養」。ご本尊の妙見菩薩は2月3日の星祭でご開帳されます。宝物は妙見菩薩像3対です。アクセスは、泉北高速鉄道泉ヶ丘駅より、南海バス畑行「妙見下」下車、約10分です。

・参考図書村々の今と昔雑誌「堺泉州」 格天



各天井

「南区のニュータウンに眠る歴史と文化」NO.8 美多弥神社（ミタジノジヤ） 【生島英造】

泉北高速鉄道光明池駅近くにある美多弥神社の創建は明らかではありませんが、祭神は天児屋根命（アメノヤネミコ）他8柱とされています。平安初期に編集された「延喜式神名帖」にある古くからあった式内社です。

数年前迄神社の近郊にあった「和田邸」（現在は老人ホームが建っている）で発見された「和田文書（堺市博物館に寄託）」によると、平安時代—鎌倉時代—南北朝時代にかけて和田氏が当地区の田畑の開発を進めて天野山金剛寺に寄進し、開発地「和田の荘」荘官の身分を獲得して後、鎌倉時代には幕府の御家人となって当地区を守る土豪武士集団として成長していった姿がうかがえます。



立派な武者姿で流鏝馬の合図役をしている小川正夫会員



南北朝時代、後醍醐天皇の世には、神社は三万坪にもわたる広大な境内を持ち、立派な社殿を備えていたといわれています。その後1577年（天正5年）織田信長の兵火によって焼失しましたが、1688年（元禄元年）楠木氏の子孫である和田道

讃（ワダドウザン）が本殿を再建しました。神社名は江戸時代に入って神仏混淆理念により、「牛頭天王宮」（ゴズテンノウミヤ）として、以降近世的な宮座仲間に引き継がれ、軍事色は消え同時に得泉寺を神宮寺として宮司が神官と社僧を兼務したといわれています。明治に入り神仏分離により、得泉寺は廃され、一時八坂神社と改称されましたが、1907年近隣の村社等を合祀して現在の美多弥神社の社名になりました。なお和田氏と楠氏については、1822年に奉納された神社の入口にある石の狛犬の台座に夫々の家紋が刻まれていますし、又神殿の前の石灯籠には「牛頭天王」の字が刻まれています。

中世の頃、和田氏は一族・領民を組織して武士団を形成し流鏝馬（ヤブサメ）・武射（ムサ）などを通して軍事力の向上を図っていたのですが、これは単なる軍事訓練ではなく祭事として行うことにより、一族と領民の結束を図るという狙いをもっていたものと思われます。近世に入って神社の宮座の仲間によって神事として引き継がれてきましたが近代に入って神事色が徐々に失われ、昭和40年代より泉北ニュータウンの開発と共に新旧住民が混在する地区となってきたことから、両者のコミュニケーションの断絶を苦慮した宮司が、流鏝馬行事の復活について地区の住民代表等の賛同を取付け、平成25年3月美多弥神社流鏝馬保存会を結成しました。しかし宮司の突然の逝去など紆余曲折はありましたが、平成26年3月29日弓馬術礼法小笠原教場一門の全面協力を得て「美多弥神社流鏝馬祭り」が挙行されました。

境内には約100本のシリブカカシ樹林があります。まとまった樹林としては、この場所が日本の北限に位置し、学術的に貴重な存在として昭和48年3月に大阪府の天然記念物の指定を受けました。外見はアラカシに似ており、秋に熟すドングリは長さが2cm前後、和名で「尻深ガシ」の意味はドングリの底部がへこんでいる為、当地では昔から食用にもされており、親しみをこめて「いっちゃん」とよばれています。

美多弥神社の駐車場に、近くの小谷城跡にあった番傘会の川柳碑が平成18年に移転されています。その内の一句を紹介します。「みだれ髪堺の浜もおくなり」美多弥神社は、南海バス、美木多バス停より徒歩5分です。

南区のニュータウンに眠る歴史と文化」NO.9 光明池

【安田元國】

光明池探訪についての原稿作成にあたって、現地を散策して説明の掲示板を見たり、現地の様子を確認したり、和泉市立図書館にて図書を読んで当時の時代観を自分なりに解釈してまとめましたが、限られたページ数もあって上手く纏められたかは分かりませんが提出に至りました。

●名称の由来（フリー百科事典記述）

光明池は、和泉市国分町を流れる槇尾川の取水堰から導水している。国分町にある浄福寺で光明皇后が誕生したという伝説にちなんで光めい明池と名付けられた。ちなみに、光明皇后の夫の聖武天皇（724年～749年）及び異父兄の橘諸兄（タチバナノミコ）は久米田池の築造に尽力のあった人物でもある。

●父鬼街道（地元ではフクロと呼ぶ）と女鹿坂（メカサカ）にまつわる獣婚伝説光明池の西側近隣に父鬼街道があり女鹿坂の地名の南海バス停留所がある。聖武天皇の頃、偉いお坊さんと女鹿との間に生まれた光り輝く（光明の如く）美しい娘が居て、都に招かれて父鬼街道を進む時、母親の女鹿が娘との別れを悲しんで後を追いかけたが、途中で急峻な登り坂に出会い追うのを諦めて引き返した、との伝説にちなんでこの坂が女鹿坂と呼ばれるようになった。

●光明池の概要（フリー百科事典記述）

1936年（昭和11年）に灌漑用溜池として整備されました。満水時の貯水量は約370万m³で大阪府下最大、満水面積は36haで大阪府下では岸和田市の久米田池、大阪狭山市の狭山池に次ぐ広さである。光明池土地改良区が管理している。堤防は二箇所あり、北側の本堤防は高さ約26m、長さ約350m、南西側の副堤防は高さ約18m、長さ130mある。水深は最深部で約20mある。最盛期には約1700haの灌漑を担ったが、減反政策等により現在の灌漑面積は約300ha程度。上水道の水源としても利用されている。

●周辺の施設（フリー百科事典記述）

周囲は「光明池緑地」として整備されており、遊歩道、体育館、野外運動施設などがある。光明池緑地は近隣住民には「野鳥の森」と呼ばれており、野鳥が多く見られる。光明池はその緑豊かな環境から、1989年に「大阪みどりの百選」に選定された。また、2009年には「大阪ミュージアム」にも登録された。

●歴史（フリー百科事典記述）

大正期～昭和初期、泉州地域で早魃（カバツ）が発生したとされる。石津川・槇尾川間に位置する町村への農業用灌漑用溜池として光明池の建設が計画され、1936年（昭和11年）光明池が完成。1985年（昭和60年）池によって分断されている光明台地区をつなぐアーチ橋の光明池大橋が架けられた。

●関連項目（フリー百科事典記述）

光明池は和泉市と堺市南区に跨る位置にあり、約1km北にある泉北高速鉄道の駅名になっている。駅は堺市、車庫は和泉市といった具合に市境付近に位置するため、両市に跨る光明池が駅名に採用されている。また、同駅周辺の広域地名にもなっており、和田川、槇尾川の丘陵地帯には「光明池」を冠する施設等が多く見られる。

★周囲5.2kmの豊かな緑に恵まれた光明池は一周できる遊歩道があります。池の中腹に架けられた光明池大橋からの眺望は抜群です。四季折々の魅力的な風景に出会える光明池に是非一度お出かけください。



「南区のニュータウンに眠る歴史と文化」NO.10

櫻井神社 上神谷の八幡さん

【森口 照男】

歴史

櫻井神社の歴史は古く、推古5年(597年)須恵器製作の技術を伝えた渡来の「櫻井氏」が先祖の武内宿禰を奉斎したのが始まり、と云われています。

延喜式発布(967年)では官幣大社に列せられ、その後、上神谷城主、小谷城主等が祈願、御供田を献納し奉護に尽くした。しかし天正5年(1577年)織田信長の兵火にかかり一時荒廃した。天正16年(1588年)には、加藤清正が再建。明治43年には、國神社を合祀。

御祭神

- ・ 櫻井神社：応神天皇、仲哀天皇、神功皇后
- ・ 國神社：天照大神
- ・ 武内神社：武内宿禰



国宝 櫻井神社 割拝殿

堺市唯一の国宝

鎌倉時代前期の建築とされる割拝殿は、昭和28年11月国宝の指定を受ける。天井を張らず、5間の間口の中央1間を馬道(マウ)の通り抜けとし左右2間には床を張った拝殿は珍しく、他には奈良県石上神宮の出雲建雄神社拝殿が知られている。

八幡さんの由来

ある時、亀乙と云う老人が現れて、応神天皇、仲哀天皇、神功皇后の三柱の神像を彫り姿を消してしまいました。いわゆる八幡神です。八幡信仰は奈良時代に入ってからですが、“上神谷の八幡さん”として地元の方々に親しまれています。

古代の天皇家と深いご縁

八幡神は欣明天皇の頃各地に現れ、娘の推古天皇の代に武内宿禰のゆかりの上神谷に祀られた。天照大神を祀る國神社(鉢ヶ峯)は伊勢神宮内宮の真西に位置し、更に西の延長線にはイザナギ神宮(淡路島)。

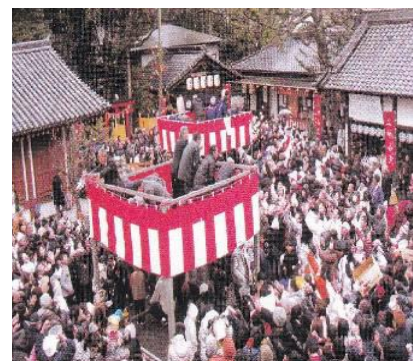
上神谷のおどり

鉢ヶ峯の國神社に伝わる行事であったが、櫻井神社に合祀されてから毎年10月5日に近い日曜日に行われている。雨乞踊りで、「ヒメコ」と呼ばれる紙花を挿した竹箆を背負った赤、黒の鬼神と天狗で構成される柱踊り4人と、締太鼓を持つ8人、他音頭取りを含め計18人で行われる。

こおどりの名前の由来について、この踊りは太鼓と笛で踊る素朴な踊りで、太鼓の鼓をとって“鼓おどり”と云われた説と、雨乞いのおどりから、“乞おどり”と云われた説があります。

上神谷の戎さん

毎年1月10日には、上神谷戎では参詣人に無料で餅が配られ大いに賑う。約500年の歴史を刻む「宮座」神社の祭り、運営、営繕は氏子の代表者が行い、その人達の集りや、会合を宮座と云う。櫻井神社では「若松荘中村結鎮御頭次第(ワカツノショウナカムラケツンオトウシダイ)」と名付けられた頭屋帳(トウヤチョウ)があり、正平6年(1351年)から明治5年(1872年)の記録が残っている。結鎮(ケツシン)とは、正月の射礼と云う行事で、的を作って弓で矢を射る事により、厄を払い福を招こうとする事です。



上神谷の戎さん

参考資料 ・ 櫻井神社由緒略記 ・ 大阪風物詩 ・ 泉北コミュニティ誌

「南区のニュータウンに眠る歴史と文化」N0.11

堺で唯一の大随求菩薩がある海岸寺

【小川 正夫】

「観ボラ南地域の集い」は、南地域の観ボラメンバーが、地元の観光資源を掘り起こすために立ち上げた親睦・勉強会です。古来泉州と呼ばれた地域には、中心となった堺だけでなく周辺地域にも貴重な文化・観光資源が眠っている筈です。これを掘り起こして、まずは観ボラの皆様に情報発信し、次には地元の皆様だけでなく広く外部の皆様にもガイドできる観光資源としていきたいと思っています。中区の平井に、珍しい黄檗宗のお寺で、海辺でもないのに「海岸寺」というお寺があります。平井にお住いの集いのメンバー S さんのご縁とお世話で、ご住職からお寺の歴史を拝聴し、貴重な仏像の数々を拝観させて頂くことができました。



本堂

平井村は、平安時代には式内社の坂上（さかのうえ）神社（現多治速比売神社に合祀）が祀られ、江戸時代には「平井千軒」と称されるほど栄えた村でしたが、その村内にあった三つの寺院が一つに集約されたのが現在の海岸寺です。

最も古い「観音寺」は、平安時代後期作と思われる二体の観音像と蔵王権現像があり、江戸時代には和泉西国三十三所第七番札所として

栄えまし たが、明治の初期には残念ながら廃寺となりました。お寺があった場所には現在「清水大師堂」と「平井」の地名の由来となった井戸が残っています。次いで「安念寺」は、大鳥大社の神宮寺であった神鳳寺の末寺で、元禄時代に中興開山瑞光和尚が堺の商人海部屋などの助けて葛上神社境内に地所を移し、境内 680 坪の大寺院として再興されましたが、明治のはじめに住持が賊に殺され無住となり、廃寺となりました。「海岸寺」というと、江戸時代には、行基建立と云われる小堂のみが残る古寺でしたが、黄檗宗の僧青海和尚がこれを譲り受け、黄檗宗本山萬福寺の末寺として創建したお寺です。宝永 2 年（下総の関宿藩が和泉国 14 カ村を領することになると、領主の久世家の庇護を受け、明治の廃藩置県まで久世家歴代当主の位牌を祀る菩提寺として存続しました。明治 6 年に、廃寺となった安楽寺に居を移し、観音寺の尊像と和泉西国三十三所第七番札所も引き継いで、現在の海岸寺となったのです。本堂、開山堂など安楽寺の堂宇を受け継ぎましたが、本堂が第二室戸台風で倒壊、残る開山堂も老朽化が激しくなったため取壊し、平成 10 年に現在の本堂が再建されました。黄檗宗寺院の特徴が、中国風の山門や本堂の卍崩しの高欄、弥勒菩薩の化身とされる布袋像などに見受けられます。本堂には廃寺となったお寺から受け継いだ驚くほど数多くの尊像が祭られています。平安時代の作と考えられる聖観音立像、十一面観音立像、蔵王権現像などは、修復の跡を感じさせない素晴らしい古仏ですが、何よりも本尊として祀られている大随求菩薩（だいでいぐぼさつ）、脇本尊の吉祥天像、毘沙門天像の菩薩三像の堂々たるお姿には驚かされました。大随求菩薩は、京都の清水寺随求堂の他三つの寺にしかないといわれる大変希少な菩薩像です。（観心寺には仏画がある）清水寺の大随求菩薩は、昨年 222 年ぶりのご開帳が話題となった秘仏ですが、この海岸寺は、檀家でもない我々衆生にも拝観が許されました。その他にも美しい百衣観音（びやくえかんのん）像、開山の青海和尚の色鮮やかなご尊像など大変素晴らしい仏像が数多く、まるで仏像宝物館のようでした。ご住職は若くしてこの海岸寺を継ぎ、爾来 50 年もの長いご在職で、倒壊した本堂、損壊したご尊像などを独力で再興された、まさしく「平成の海岸寺中興開山」ともいえる方ではないかと思いました。まだまだある堺の隠れた文化財を発掘し、多くの方に知っていただけるように、みんなで頑張りましょう！※参考文献；『平井ふるさと昔話』平井自治会／編（堺市図書館蔵）



中国風山門

泉北ウォーキング I

【宮尾 喜治】

泉北地区には「泉ヶ丘緑道」「榎・美木多緑道」「光明池緑道」等とそれらを繋ぐ里道などを合わせると 50 km 程にも及ぶよく整備された遊歩道があり、緑道に配置された美

しい公園、各所に点在する由緒あるお寺や神社、更には古墳群や須恵器ゆかりの遺跡等々、見どころたっぷりのウォーキングコースがあります。その中から取り敢えず大胆に 3 コースに絞ってお勧めしたいと思います。それは、集合・解散に便利な「駅」を起点としたもので、今回は「光明池駅起点コース」を紹介させていただきます。

光明池駅起点コース



光明池駅 ➡ 榎尾千塚跡 ➡ 甲斐田川 ➡ 鴨谷公園 ➡ 光明池 ➡ 光明皇后碑 ➡ 光明池大橋 ➡ 光明池守護神社 ➡ 光明池駅 の約 7 km のコース

・榎尾千塚跡（榎尾塚原古墳群 8 号墳）

駅からすぐのメモリアルホールの東側にあり、モデル墳（円墳）でニュータウン造成後に造られたものです。通常の横穴式石室とは異なり、木の骨組みに粘土の壁を設けた「木芯粘土室」と呼ばれる考古学的には全国でも珍しい構造です。鉄格子越しに覗き見ができます。

・甲斐田川・鴨谷公園

光明池の「除（よぎ、よけ）」から流れ出した水が甲斐田川の源流になっています。ニュータウン造成前は垣内川とも呼ばれていましたが、いまは泉北高速鉄道の下を暗渠にして東に 1 km ほど流れて和田川に合流しています。また、鴨谷公園はその名のとおりたくさんの鴨がいる池があり、周りにはアヤメやリンドウ、山ゆりなどの宝庫だったそうです。

・光明池

1931 年（昭和 6 年）から 5 年かけて、灌漑用のため池として整備されたものです。

満水時の貯水量は約 370 万 m³で、府下最大。満水時の面積は 36 万 m²で府下では岸和田市の久米田池、大阪狭山市の狭山池に次ぐ広さであり、水深は約 20m です。

・光明皇后伝説

奈良時代に権勢を振るった藤原不比等が天皇の勅命をうけ槇尾山詣での帰り道、光り輝く田（照田光田）があり、よく見るとそこに光り輝く少女が佇んでいた。調べると少女は滝山で修業していた僧と女鹿との間に生まれた子であった。美しい才気活発な少女は不比等の養女として都に連れて行かれることになり、その知らせを聞いた母鹿は最後の別れをと樹々に隠れ隠れ跡を追うが、林も途切れてしまいついに最後の別れとなったのが今の南海バス停の女鹿坂（めまさか）です。この少女が後に光明皇后になられたとされています。（光明皇后と



は光り輝くような美しさが名の由来とも言われている。また和泉市国分町には古くから光明皇后の誕生伝説があり、池を造った時に伝説に因んで光明池と名付けたとも。）

・光明池大橋

1985年に建設されたもので、橋長は157.6m、コンクリート中路アーチ橋で、同年に権威のある土木学会賞のひとつ田中賞を受賞しました。



光明池を望む美しいこの辺りの景観は「大阪みどりの百選」に選ばれており、水と緑の

コントラストもすばらしく、自然がゆっくりと満喫できるコースです。平成21年には大阪ミュージアムにも登録されています。



「梅・美木多駅起点コース」と「泉ヶ丘駅起点コース」も、またの機会に紹介させていただきます。

2021年4月号(287号)

【宮尾 喜治】

泉北ウォーキング 2

「梅・美木多駅起点コース」

梅・美木多駅 ➡ 牛石古墳 ➡ 行者堂 ➡ 檜尾大橋 ➡
 和田川・甲斐田川合流点 ➡ 和田邸跡 ➡ 美多彌神社 ➡
 放光寺 🚗 梅・美木多駅 の6kmコース

・牛石古墳

西原公園に入ると、すぐに牛石古墳があります。後期古墳時代のもので推定されていて、被葬者は須恵器の生産に携わっていた首長クラスの人物と思われます。ただ、副葬品は全く出土せず、表面の土も剥ぎ取られて石室の天井石がむきだしになっており、その形が牛の寝ている姿に似ていることから「牛石古墳」の名がついています。



・行者堂

役行者とか修験道と云うと我々は清学院を思い起こしますが、ここ檜尾の行者堂には役小角像が安置されていて軒下には修験者の修業を伺わせる「歯が一本の鉄の高下駄」が掲げられています。諸国を巡り歩く修験者は一本歯の高下駄を履いて苦行したが、その極限に鉄の下駄を掲げて、戒めにしたのかも知れません。もう一つ、沓脱石です。踏み面に幾つもの穴が掘られています。これは、江戸時代から続く泉州の安産信仰の一つで「母子ともに無事でありますように」との願いを込めて、親指で血をにじませながら必死で石に穴を掘り続けて出来た「くぼみ」と言われています。修験道や山岳宗教そして泉州の安産信仰などに深い関わりを持つ「行者堂」。必見です。



・ 檜尾大橋

檜尾集落のなんとなく懐かしい雰囲気の中、細い農道を少し歩くと一気に展望が開けて檜尾大橋に。

この橋は、泉北1号線・泉北高速鉄道を開通させるために丘陵を開削してその上に造られました。それまでは檜尾集落は尾根続きで一つでしたが、それが2つに分断されてしまったのです。兩岸の住所を見ると、どちらも「檜尾」となっています。尾根の代りに檜尾大橋が造られた訳ですが、ここから見渡す景色は東西に大きく拓けていて壮観です。



・ 甲斐田川と和田川の合流点

前回、散策した光明池の鴨谷台の野球場あたりから、暗渠に入り約 900m潜った甲斐田川が檜尾村を出て下りきった高橋というバス停のすぐ傍で、和田川と合流しています。ここでは、なぜか、いつも大きな鯉がウヨウヨ泳いでいます。



・ 和田邸跡

田園風景の続く和田川沿いを遡って行くと和田邸跡に至ります。4～5年前まであった「菊水の紋」が描かれた重厚な白い母屋も完全に取り壊され、今は高齢者施設になっていて、「旧和田邸跡」の石碑だけが残っています。和田川とか岸和田の名を残した一族も消えてしまったか？と正に歴史の流れを感じさせられます。

そして最後の行程として、平安時代の延期式にも載る「美多彌神社」と花の寺として知られる「放光寺」を訪れます。梅丘陵から檜尾村に至る田園風景、集落に残るかすかな昔の雰囲気、和田川沿いの自然を身近に楽しめる里道そして神社、お寺などの名所旧跡など変化に富む見どころたっぷりのウォーキングコースです。

2021 年 5 月号(288 号)

泉北ウォーキング 3

【宮尾 喜治】

「泉ヶ丘起点コース」



泉ヶ丘駅 🍗 須恵器窯跡 🍗 竹城台・宮山台公園 🍗
多治速比売神社 🍗 梅林 🍗 荒山公園 🍗 小谷城址 🍗
櫻井神社 🚗 泉ヶ丘駅 の 6 km コース

須恵器窯跡（移築復元窯） 大蓮公園内に移築

復元された窯跡（TG61）で、当時の典型的な構造や仕組みが良く分かります。窯は斜面におよそ幅 2m、深さ 1.5m、長さ 8m 前後の大きさで、天井は粘土にスサ*を混ぜて作られたそうです。須恵器は古墳時代中期、朝鮮半島より「陶邑」に伝わりました。「陶邑」とは大阪湾を望む泉北ニュータウン一帯のことで、東西 15 km・南北 10 km くらいの範囲です。ここに 1,000 基前後



の窯が造られたと云われており、この地区で焼かれた須恵器は九州から東北地方まで流通していた事が分かっています。泉北丘陵地帯は平安時代中期まで 500 年間程も須恵器生産の一大拠点だったのです。

《スサ：粘土のひび割れを防ぐために切り刻んで土に混ぜる、わら、紙、麻、など。》

荒山公園と梅林

堺市が多治速比売神社の敷地の一部を取得して造られた、総面積 17 万平方メートルの公園です。梅林は昭和 59 年から 60 年にかけて、面積 2 万 7,000 平方メートルの土地に植栽されました。現在、50 品目・約 1,200 本あり 2 月中旬から 3 月上旬に見頃を迎えます。



小谷城址

小谷城は鎌倉時代中期に標高約 80m の山に造られた堺で一番古い城です。南北朝時代には南朝に味方し、千早城で上げたのろしを浜寺の大雄寺まで結ぶ中間的連絡拠点として重要な役割を果たしました。しかし、戦国時代に入り当時この辺りは根来党であったため、信長の根来攻めにより天正 3 年（1575 年）に落城しました。今は石碑一つ残して展望台となっており、梅美木多駅付近から石津川など一望できます。



泉ヶ丘駅からビッグバンの前を通り抜け須恵器窯跡に至り、緑いっぱいの竹城台・宮山台公園を満喫しながらの多治速比売神社への道は、案外知られていない楽しいコースです。

そしてこの後、前回の堺特別文化財公開で好評だった多治速比売神社を拝観し、荒山公園の梅林、小谷城址を経て最後の行程である、堺市内唯一の国宝割拝殿のある櫻井神社を目指す約 6 km の行程です。少しアップダウンもあり歩くには最適で、四季を通じて楽しめるコースですが、2 月から 3 月の「梅」に合わせるのがベストかも知れません。

他に高倉寺、法道寺、上神谷妙見や陶荒田神社等々多くの行ってみたい名所旧跡があり、緑道里道と組み合わせると、いろいろな楽しいウォーキングコースが考えられます。

まずは、3 回に渡って紹介しました 3 コースに挑戦し、楽しんで頂きたいと思います。

『幻の陶器の里』ご紹介 ①陶工の首長の墓 湯山古墳

【小川 正夫】

『幻の陶器の里』の観光資源としての魅力を、勉強会に参加されなかった会員の皆様にも知っていただきたく、ご紹介の連載を始めたいと思います。初めにご紹介するのは、消滅してしまった幻の陶工首長の前方後円墳です。

渡来系の新技術をもった陶工氏族が、大和政権の保護を受ける特別な氏族であったことは、大和政権から認められた豪族にだけ許された前方後円墳が、陶工の首長たちの墓に多くみられることから明らかでしょう。その陶工氏族のなかでも、最高位の首長の墓と思われる前方後円墳が「湯山古墳」です。陶工氏族の数多い「群集墳」という墓域ではなく、「陶邑」全体を見下ろす湯山と呼ばれた山の頂上に造られ、考古学者の森浩一先生によれば「全長 30m 以上の横穴式前方後円墳で、羨道長 3m、天井石に覆われた 4m の玄室の中に家形石棺が安置されていた」と記録されています。陶邑の陶工達が仰ぎ見る山頂に祀られ、他に類を見ない豪華な石室・石棺を備えていることから、その被葬者が特別な存在であったと思われます。



残念ながら昭和 30 年代の土砂採取のため古墳破壊が進んだ時期に、この古墳は湯山もろともに破壊され、山頂の石室も崩れ落ちてしまいました。堺市博物館（中庭に面した側室）には、現地から採取された一片の石片と、レプリカですが全長 2m の立派な組合式家形石棺が展示されており、被葬者の権威が偲べれます。

しかし、崩された湯山の跡地に、昭和 36 年に建てられた十川ゴム堺工場に、その石室、石棺の破片と思しき古石群が大事に保存されていたのです。観ボラ南地域の会のメンバーと十川ゴム様を訪問し、実物を拝見させて頂きましたが、その大きさと多さに驚かされました。十川ゴム様にとっては、この石組は工場の護り神で、工場建設の際に事故が多発し、工期の遅れが心配された時、残されていたこの石群をお祀りしたところ、事故は収まり無事工期通り完成したとのことで、未だに工場の安全稼働祈願の為に毎月の礼日礼拝が続けられているとのことです。

また、湯山の麓の溜池に挟まれた「陶の里広場」には、湯山古墳を偲ばせる前方後円墳のレプリカが造られています。

消滅してしまった古墳遺跡が、現代にまで神の石として大事に保存されていることに、陶器の里の歴史のロマンを感じますね。



※十川ゴムさまのご許可なしに拝観することは不可ですので、ご注意ください。

『幻の陶器の里』ご紹介 ②陶器荘の支配者

【小川 正夫】

須恵器の生産が終焉した「陶邑(すえむら)」の生産工場であった無数の窯跡群は、原初と同じく人家もまれな山間部に戻りますが、須恵器の集荷・配送センターがあった山麓部は、豊かな田園地帯「陶器荘」へと生まれ変わっていきます。行基さんに代表される渡来系土木技術集団により、陶器川、菰田川、前田川など、須恵器の輸送路であった河川を利用した溜池が多く造られ、農地開発が進められたのです。



陶器城(北村砦)跡

茅渟県(ちめのあがた)陶邑の支配者は「荒田直(あらたのあたひ)」という県主(あがたぬし)で、その祖神(おやがみ)が祀られたのが「陶荒田神社」です。須恵器生産が衰えて農地開発が進んだ奈良時代には、溜池の水源地の山間に「行基四十九院」の最初のお寺である「大須恵院(高倉寺)」が建立されました。

鎌倉時代の陶器荘を支配したのは、幕府の御家人陶器左衛門尉(さえものじょう)で、南北朝時代には楠木氏や和田(みきた)氏など南朝方の攻撃を「陶器城」で受けますが、それは今も残る堺市の中世城郭遺構としては最大規模の「北村砦」であったとされています。

戦国時代には、豊臣秀吉の叔母の夫 小出秀政を祖とする小出氏が陶器荘を支配します。豊臣親藩でありながら江戸時代にも大名家として存続し、その分家の小出三尹(みつまさ)が一萬石の大名として陶器藩を起こし、陶器荘に陣屋を構えました。徳川譜代で固められた畿内では数少ない外様大名でしたが、2代目小出有棟(ありむね)の時には、幕府お抱えの儒学者林羅山(はやしらざん)を領内の「お茶山」に迎え「陶器十景」という漢詩を詠んでもらうなど幕府にも信頼され、大坂の商人福島屋治郎兵衛に新田開発を委ね領内最大の福田村をつくるなど、陶器荘の繁栄を築きました。しかし3代有重(ありしげ)は酒色に溺れた暗君で幕府の不興をかい、4代重興(しげおき)の無嫡子(むちやくし)を理由に小出藩は取り潰され、陶器荘は幕府直轄領となります。

不在の幕府代官にかわり陶器荘を支配したのは大庄屋の村田仁左衛門で、村田家は陶器城址の旧城内に有り、今もそこに残っています。幕府の陶器荘経営は、百年続いた小出氏支配に慣れた農民の反感をかいうまくいかなかったのか、10年を経ずして陶器荘は小出一族で幕府の旗本であった有仍(ありより)の領地となり小出氏の支配が復活します。旗本



兒山家住宅

小出氏は江戸勤番で、陶器荘の支配は豪農の兒山(こやま)家が、大庄屋から後には直臣の代官として取り仕切りしました。兒山家は明治の廃藩置県まで陶器荘の代官を務め、維新後には兒山銀行を起こすなど、地域の殖産に貢献をしました。兒山家は陶器川沿いの地に広大な屋敷を構え、本家住宅は残っていませんが、分家の東兒山家が江戸時代の豪農の住宅として国の登録有形文化財となって今も残っています。

『幻の陶器の里』ご紹介 ③堺市の母なる川 石津川水系 【小川 正夫】

大和王権の権力の象徴である前方後円墳と須恵器の拠点、「百舌鳥古墳群」と「陶邑」があったのは、河内（後に摂・河・泉に分かれる前の「汎（おおし）河内」）と呼ばれる国でした。名前の通り大阪湾に注ぐ無数の河川が満ち溢れる国で、大和と中国を中心とした世界を結ぶ重要なゲイトウェイ（結節点）でした。百舌鳥古墳群を建設するために膨大な人材と資材が全国から集められ、陶邑で生産される多数の須恵器が全国に配送されますが、その重要な輸送路となったのが石津川水系です。

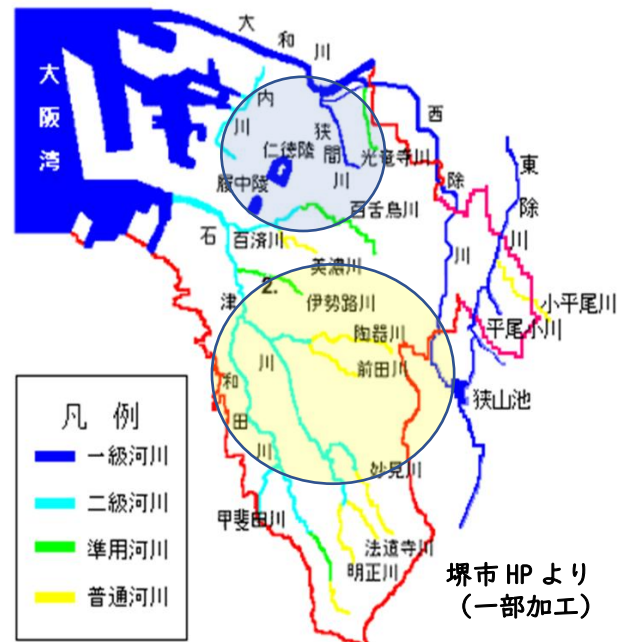
大和川が堺を流れるようになるたかだか 300 年前どころか堺の街ができるより遥か昔、汎河内から和泉の国が分かれ、大鳥郡という今の広域堺市とほぼ同じエリアの行政区画が成立しますが、その母なる川は石津川でした。石津川水系は、泉北丘陵から大阪湾に注ぐ無数の河川の集合ですが、百舌鳥古墳群エリアを流れる百済川、百舌鳥川、陶邑エリアを流れる陶器川、

前田川、和田川などを集め大阪湾に注いでいます。その河口には、水門（みなと）があり「石津」といわれましたが、これは古墳築造の為に海から運ばれて来た石材の津＝水門という意味で百済川、百舌鳥川が古墳の建設現場に人と物を運ぶための主要な輸送路であったことによると考えられます。陶器川、前田川、和田川上流の須恵器生産現場から下流の集荷配送センターの陶工集落に集められた須恵器も、これらの川を輸送路として石津水門から大阪湾経由で各地に運ばれたのでしょう。

世界に繋がる大阪湾の中央にあった石津は大和にとって重要な港でした。平安時代に書かれた紀貫之の『土佐日記』には、和泉国の港として南から「小津（おづ）」と「石津」が記載され、次は摂津国の「住吉（すみのえ）」となっており、その途中に堺は無く、「堺津」が登場するのは廻船鑄物師（かいせんいもじ）が活躍する鎌倉時代の 13 世紀まで待たねばなりません。

道路というインフラが整備されるのは、7 世紀に遣隋使を迎えて大和川経由で馬や輿を使って使節を都に案内するのに難渋したことを恥じた推古天皇の「難波より京に至るまで大道を置く」という大命により造られた「難波大道」にはじまり、全国に「七道駅路」という道路網が整備される奈良時代のことになります。道路が整備されていくと川の役割は変わっていき、水田という食料生産設備の整備のために雨量が少なく湿地が無い河内平野には渡来系の行基集団により灌漑池が造られ、乾いた荒野が豊穡な田園地帯へと変わっていきます。江戸時代の新田開発ブームにより灌漑池はさらに増加し、そのおかげで多数の河川群はやせ細り、輸送路から単なる農用水路へと変貌していったわけです。

陶器川をガイドする時、お客様から「こんな川で須恵器を運べるの？」と問われたら、落ち着いて「それは行基さんのせいなんですよ・・・」と、説明してください。



堺市 HP より
(一部加工)

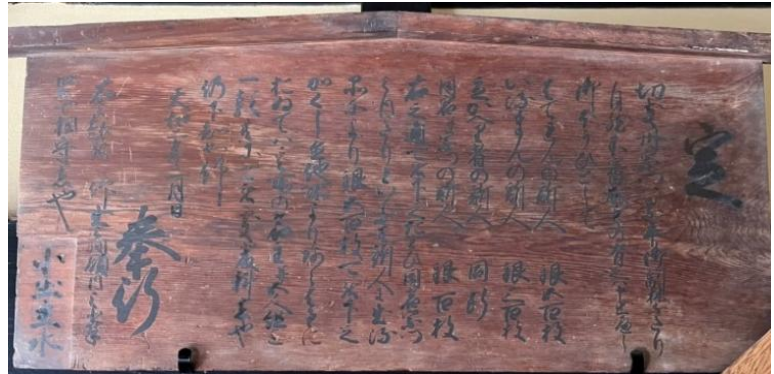
参考文献 『堺市中区の歴史文化を訪ねて』 堺市中区ふれあい事業推進委員会 中区まちづくり考房
魅力／歴史文化グループ編

北村古壘（陶器城跡）について

【渡邊 和彦】

北村古壘はベルランド総合病院の東 1.7km 程の中区陶器北にある城跡で、周辺には 5 世紀頃の須恵器の窯跡が点在し、それに関連する多くの遺跡（小角田遺跡、陶器遺跡等）や古墳群（陶器千塚）があり、古くから開けた土地に存在しています。

3 月 28 日、村田家にお伺いし、観ボラメンバーと北村古壘を見学させていただきました。村田家と北村古壘、どう関わりがあるの？ と疑問に思われるかもしれませんが。実は、堺市の史跡でもある北村古壘は、村田家の敷地内にあって、庭園が古壘になっています。この古壘を代々守ってこられたのが村田家です。



切支丹禁札

この古壘を巡って、1333 年北条氏の家臣

で陶器城主の「陶器左衛門尉」が楠木正成に攻め滅ぼされ、1351 年北朝方の居城となっていた陶器城を和田助氏と淡輪助重が楠木正儀（クスノキマサノリ）に従って攻撃したといった記録が残されており、北村古壘も戦場と化した時もありました。

さていよいよ村田家の玄関から中に入ります。中に入ると切支丹禁札の高札が壁面に掛けられています。天和 2 年（1682 年）と思われる日付で、バテレンやキリシタン等を訴え出た者には、銀 500 枚の褒美を与えるといった内容が書かれています。



枯山水の庭園

また、高札の左下角が削られて、そこに小出主水と書かれています。この高札を村田家で所有されているのはどうしてでしょうか？陶器庄は 1604 年小出三尹（コイデミツマサ）が陶器藩を立藩し 1 万石の大名となり、4 代重興に跡継ぎが無く 1696 年陶器藩は改易・領地没収、幕府直轄地として代官支配になりました。その後 1705 年小出有仍（コイデアリヨリ）が 5 千石の旗本として陶器小出氏を再興し、明治維新まで続きます。小出氏の陣屋は陶器庄にありましたが、実際の行政は 18 世紀の中頃までは村田家が、それ以降は兒山家が大庄屋として担いました。この高札が掲げられた天和 2 年（1682 年）には村田家が大庄屋として行政を担っていて、小出主水の記載から 18 世紀中頃までその任に当たっていたことが伺えます。

それでは、古壘のある庭園にお邪魔します。この古壘については、1819 年頃に岸和田藩士浅野秀肥が作成した和泉国大鳥郡城跡図に「北村古壘之図」として描かれていて、この古壘図を参考にして堺市が発掘調査をしています。陶器城跡（北村砦跡）第 3・4・5 次発掘調査報告の図 20「周辺の現況 地形図」及び図 56「陶器城跡（北村砦跡）の復元試案」から、「北村古壘復元図」を小生なりにまとめています。

まずは、クスノキ、アラカシ、アベマキといった堺市の条例に基づいた 12 本の保存樹林や竹林の緑豊かな本丸跡裾野から 4m 程登り標高 75m 前後の頂上を目指します。村田家の庭に入ると本丸跡西側斜面に、石垣、滝、川、灯籠から成る枯山水の庭園が広がっています。ここから階段を上ると概ね 8m

×14m 程度の隅丸の形をした頂上に着きます。北西隅には近世の瓦質の祠があります。この祠は「北村古壘之図」に描かれた「宇賀御魂明神」の位置に合致します。木々の間からの眺めは素晴らしく、空気が澄んでいると淡路島まで良く見え、建物が少なかった頃は大阪湾の海の輝きも見ることができたようです。かつては四方八方を見渡せ、近くを通る西高野街道や河内・和泉・摂津、大阪湾の様子も伺い知ることのできる絶好の場所に北村古壘が在りました。本丸跡から堀に向かいます。土堀が見えてきました。近世以降に作られた瓦葺の土堀で、土堀には須恵器の破片が混じっているようで、大変趣のある土堀です。木戸をくぐると本丸跡北側に出ます。樹齢 700 年の巨大なクスノキが我々を迎



樹齢 700 年のクスノキ



瓦質の祠



本丸跡の堀跡

えてくれます。百舌鳥八幡宮のクスノキより大きいように思います。横に立った人が大変小さく見えます。本丸跡の東側堀と南側堀にある堀跡を巡ります。堀跡には倒木もなく、樹木や竹も少なくて歩き易く、事前に倒れた竹の片づけ等、見学に支障をきたさないよう村田家で整備してくださったそうです。堀跡西端には瓦積の台があり、ここにも祠があったそうです。

次に南曲輪に向かいます。南曲輪の北半分は幼稚園、南半分が畑で外周は住宅と道路になっています。東側の一部に土塁の高まりがあり、周囲に土塁が巡らされ堀があった事が想像できます。

北曲輪に向かいます。曲輪内には住宅が立ち並び当時の様子をうかがい知る事はできませんが、東側の土塁や堀の痕跡（水路等）が一部残っています。また北西隅には祠に収められた石仏があり、「北村古壘之図」に「石地藏アリ」と記載されている事から同じ石像と考えられます。またこの石仏の近くに、西隣の辻から移された「文政十三寅年六月吉日」と彫られた伊勢灯籠があります。

発掘調査報告によると、北村古壘は南北 200m、東西 180m にわたる城郭跡で、「北村古壘復元図」の一点鎖線沿いに土塁と堀が巡らされていました。ただ南曲輪の南側には堀が無かったようですが、南方には陶器川によって幅約 100m、高さ 9m の谷が作られ、険しい地形となっています。北村古壘は 14 世紀以降から 15 世紀にかけて南曲輪と北曲輪の土塁と堀が完成しました。その後、本丸跡が築造された可能性があるようです。残念ながら中世の城郭や近世の陣屋などを特徴づける遺構や遺物については、今のところ確認されていないようです。



伊勢灯籠

北村古壘を村田家のご当主でお医者様の村田先生にご案内いただきました。いつの間にか消滅した古墳や城跡が多い中、村田家のご努力で古壘は整備され、かつての姿を保っています。陶器左衛門尉と楠木正成が戦った頃に芽を出したクスノキが陶器庄を見守り、今や大木となっています。この古壘や風景がいつまでも続く事を祈っています。村田先生ありがとうございました。